

目 次

まえがき	i
序 本書の概要	1
本書の概要と構成	1
用語の解説	3
第 1 章 一般化と有標性	9
1.1 一般化	9
1.2 有標性	11
第 2 章 モーラと音節	15
2.1 これまでの研究	15
2.1.1 定義と役割	15
2.1.2 モーラ言語と音節言語	19
2.1.3 音韻階層	23
2.1.4 「音節言語」におけるモーラの役割	25
2.2 詩の韻律	32
2.2.1 五七五のリズム	33
2.2.2 字余り現象	34
2.3 音韻規則	36
2.3.1 モーラの上に言及する規則	36
2.3.1.1 エロ本とエッチ本	36
2.3.1.2 「__次郎」のアクセント	38
2.3.1.3 「__屋」のアクセント	41
2.3.1.4 「__町」のアクセント	43
2.3.1.5 平板化形態素	45

2.3.1.6 南アメリカと南カリフォルニア	49
2.3.2 音節にも言及する規則	56
2.3.2.1 アクセント核移動現象	56
2.3.2.2 「__太郎」のアクセント規則	58
2.3.2.3 平板型アクセントの生起条件	60
2.3.3 音節のみに言及する規則	65
2.4 形態規則	68
2.4.1 モーラのみに言及する規則	68
2.4.1.1 複合語短縮規則	68
2.4.1.2 混成語規則	72
2.4.2 音節にも言及する規則	78
2.4.2.1 単純語短縮規則	79
2.4.2.2 ブージャ語	83
2.4.2.3 「グレージュ」タイプの混成語	86
2.4.3 音節のみに言及する規則	90
2.5 言い間違いと吃音	90
2.5.1 言い間違い	91
2.5.1.1 言い間違いの種類	91
2.5.1.2 モーラの必要性	94
2.5.1.3 音節の必要性	101
2.5.2 吃音	102
2.6 音楽のテキストセッティング	106
2.6.1 1 モーラ = 1 音符の原則	106
2.6.2 Happy Birthday のテキストセッティング	108
2.7 言語獲得／発達	112
2.7.1 赤ちゃん言葉	112
2.7.2 しりとり遊び	114
2.8 フットの役割	120
2.9 まとめ	126
補遺	131

第3章 モーラと音節に関する史的考察	135
3.1 言語類型と日本語	136
3.2 モーラ方言と音節（シラビーム）方言	138
3.3 甌島方言との比較	143
3.4 鹿児島方言で現在進行中の変化	156
3.5 鹿児島方言のモーラ性	161
3.6 まとめ	170
第4章 歌謡と音韻構造	175
4.1 英語のテキストセッティング	176
4.2 日本語のテキストセッティング	179
4.3 Happy Birthday to You の分析	182
4.3.1 英語の Happy Birthday to You	183
4.3.2 日本語の Happy Birthday to You	185
4.3.2.1 日本語のテキストセッティング	185
4.3.2.2 二重母音と超重音節	195
4.4 野球の声援の分析	202
4.4.1 基本構造	202
4.4.2 アクセントの中和	208
4.4.3 二重母音と超重音節	210
4.4.4 他の現象との共通性	212
4.5 まとめ	223
第5章 プロミネンスの衝突	229
5.1 英語の「強勢の衝突」	232
5.2 日本語の「高音調の衝突」	238
5.2.1 近畿方言における高音調衝突	238
5.2.1.1 低起無核型	238
5.2.1.2 高起二型	240
5.2.1.3 式の変化	245

5.2.2	甌島方言の文節内の高音調衝突.....	247
5.2.3	甌島方言の文節間の高音調衝突.....	252
5.2.4	鹿児島方言の呼びかけイントネーション	260
5.2.5	鹿児島方言の強調イントネーション	266
5.2.6	まとめ	269
5.3	モーラ間のプロミネンス衝突	270
5.3.1	赤ちゃん言葉のリズム	270
5.3.2	元号のリズム	275
5.3.3	他の現象	282
5.3.3.1	外来語の短縮.....	282
5.3.3.2	ブージャ語.....	284
5.3.3.3	野球の声援.....	285
5.4	母音と母音の衝突.....	288
5.4.1	Hiatus の忌避.....	289
5.4.2	二重母音	294
5.5	子音と子音の衝突.....	297
5.6	まとめ	301
結び		305
本書のまとめ		305
最後に		308
英文要旨 (English summary)		311
参照文献		314
索引		324

前2巻と重複するところがあるが、その点にご寛容願いたい。

本書は概要と用語を解説した序章に加え、5つの章から構成されている。第1章において「一般化」と「有標性」という言語学の基本的な考え方を略述する。これらは本書で展開する日本語の分析にも不可欠な概念である。続く2つの章ではモーラと音節をめぐる問題を取り上げる。第2章ではまず日本語の様々な現象—詩の韻律から音韻規則、形態規則、言い間違い・吃音、音楽のテキストセッティング、乳幼児の言語獲得—を分析し、そこでモーラ、音節、フットという概念がどのような役割を果たしているか考察する。第3章では九州西南部の二型アクセント地域に観察される3つの対照的なアクセント体系—「モーラで数えてモーラでアクセントを担う体系」(長崎方言)、「モーラで数えて音節でアクセントを担う体系」(甌島方言)、「音節で数えて音節でアクセントを担う体系」(鹿児島方言)—を通時的視点から分析し、モーラ体系から音節体系へという変化のプロセスと、その背後にある一般的な原理を考察する。

本書の後半(第4章、第5章)では、これまで体系的な研究が行われていなかった歌謡と言葉の関係(第4章)と、様々なレベルにおけるプロミネンスの衝突(第5章)を分析する。第4章で俎上にあげるのはテキストセッティングと呼ばれる楽譜と歌詞(単語)の関係である。先に作られた歌詞に音符が付与されるタイプのテキストセッティングと、それとは逆に楽譜が先に作られ、そこに歌詞が付与されるタイプのテキストセッティングの両方を分析し、分節単位としてのモーラ／音節の役割や、歌の分析から見えてくる音節構造の問題—二重母音の認定、超重音節の有標性—を考察する。

最終章の第5章で考察するのは様々なレベルに観察されるプロミネンスの衝突(prominence clash)である。強さアクセントを持つ英語では、アクセント(強勢)同士が隣接する構造—強勢の衝突(stress clash)—が有標とされ、その構造を避けようとして種々の現象が起こることが知られている。この章では、類似の現象が高さアクセント言語である日本語にも観察されることを指摘し、「プロミネンスの衝突」という一般的な概念で統一的に説明することを提案する。その代表的なものが諸方言に観察される高音調の衝突(high tone clash)である。1語の内部や語が連続する環境において、語アクセント

の高音調やイントネーションの高音調が連続もしくは隣接して生じることがある。そのような場合に、一方の高音調を削除したり、あるいは移動させたりして、2つの高音調が衝突することを避けようとする。高さアクセントを持つ日本語でも、強さアクセントに特徴的と考えられてきた強勢の衝突を回避する現象とよく似た現象が起こるのである。

第5章の後半では、「プロミネンスの衝突」という概念をモーラレベルや分節音のレベルにまで拡張し、そこでも強勢の衝突や高音調の衝突を避ける現象と同じ原理が働いていることを指摘する。モーラレベルでは、音韻的に強いモーラ（自立拍）と弱いモーラ（特殊拍）の中で、前者が連続する構造がプロミネンスの衝突を作り出し、間に特殊拍を挟むことによってその衝突を解消しようとする。これまでも日本語では〔重音節＋重音節〕(Heavy+Heavy)と〔重音節＋軽音節〕(Heavy+Light)の2音節構造が好まれ、一方〔軽音節＋重音節〕(Light+Heavy)や〔軽音節＋軽音節〕(Light+Light)の2音節構造が忌避されることが、赤ちゃん言葉（マンマ、ダッコなど）や元号（昭和、平成、令和など）、外来語の短縮形、ズージャ語をはじめとする様々な現象の分析で指摘されていた。この章では、この韻律構造の偏りが、プロミネンスの衝突という一般的な原理で説明できることを示す。また言語一般に観察される母音連続ハイエイクス (hiatus) を避ける現象や、聞こえ度の大きい子音同士の結合 (consonant cluster) を避けようとする現象もまた、プロミネンスの衝突を避けようとする一般的な原理に還元できることを主張する。

用語の解説

専門用語や記号、略号については次の定義に基づいて議論を進める。

<アクセント・ピッチ>

アクセント (accent)：先行研究ではこの語が (i) 語の韻律特性、(ii) 特定の音節またはモーラに付与された音韻的プロミネンス（際立ち、卓立）、(iii) 個別の語彙のアクセント型など、複数の意味に用いられているが、本書では混乱を避けるために (i) の意味で用いる。(ii) に対してはアクセント核、(iii) に対してはアクセント型という用語をそれぞれ用いる。

第 1 章

一般化と有標性

1.1 一般化

言語研究においてもっとも重要な概念が一般化 (generalization) である。これは言語学だけでなく、広く科学と呼ばれている研究領域に不可欠な概念であり、一見すると無関係に思える複数の現象が統一的に捉えられるようになることを意味する。自然科学における一般化を理解するために、物理学者で東京大学総長や文部大臣を務めた有馬朗人氏 (1930~2020) のエッセー「統一への努力」(朝日新聞「しごとの周辺」) を紹介しよう。

自然科学の進んできた道程を振り返って見ると、長年別々な現象とわかれてきたものの裏にひそんでいる共通性をみつけ、両者を統一して理解することによって、飛躍的な発展がもたらされたことがきわめて多い。

よく知られている例は、ニュートンの発見した力学である。1600 年代はニュートン力学によって、太陽のまわりを回転する水星や金星などの惑星運動と、地上の物体の落下運動が全く同質のものとして説明できるようになった。そしてリングと地球の間にも、惑星のような大きなものの間にも、まったく同じ重量が働いていることが分かった。

電気と磁気という一見違った現象も、ファラデーやマクスウェルたちによって電磁気学にまとめられた。前世紀¹の終わりごろのことである。

この電磁気相互作用と、原子核のベータ崩壊や素粒子の崩壊で重要な役割を演じる弱い相互作用が、ワインバーグとサラムにより、電弱統一理論

1 「前世紀」とは 19 世紀のこと。

第2章

モーラと音節

この章では、詩の韻律やアクセントなどの音韻現象、短縮語などの形態現象（語形成現象）をはじめとする日本語の様々な現象において、モーラ、音節、フットの3つの単位・概念が果たす役割を考察する。2.1節ではまず、この3つの概念がこれまでの研究および現代の音韻研究においてどのように捉えられてきた（捉えられている）か検討する。続く2.2～2.8節では東京方言を軸として、日本語の詩の韻律（2.2節）、音韻規則（2.3節）、形態規則（2.4節）、言い間違いと吃音などの非流暢性発話（2.5節）、音楽の構造（2.6節）、乳幼児による言語獲得（2.7節）において、モーラと音節がどのような役割を果たしているか分析し、あわせて日本語においてフットという単位も不可欠なものであることを指摘する（2.8節）。最後に2.9節では、モーラと音節について、大人の文法と子供の言語獲得との間に一見矛盾した関係が観察されることを指摘する。

2.1 これまでの研究

2.1.1 定義と役割

音声現象の分析にモーラ (mora) と音節 (syllable) が用いられることはよく知られている。一般にモーラは重さ・長さを測る単位であり、一方音節は、母音や子音を束ねた単位である。また、アクセントなどの分析では2つのモーラや音節から成るフット (bimoraic foot, disyllabic foot) の有用性や、モーラと音節の概念を合体させた音節量 (syllable weight) の重要性も指摘されている (Arnason 1980, Hayes 1995)。

しかしながら、どの音や音連続がモーラ・音節・フットを形成するかは言語間で微妙に異なっており、言語ごとの検討が必要とされる。日本語で

第3章

モーラと音節に関する史的考察

前章では子供の言語獲得も含め、日本語における「モーラ」と「音節」の役割と関係を共時的な視点から考察した。この章では同じ問題をアクセント体系の変遷に焦点を当てて、通時的な観点から分析してみる。3.1 節ではアクセント体系の類型におけるモーラと音節の役割を考察し、日本語の方言が類型論的に多様であることを示す。続く 3.2 節では、その多様性の中でも「モーラで数えてモーラでアクセントを担う体系」と「音節で数えて音節でアクセントを担う体系」が九州西南部の狭い地域に存在することを指摘し、3.3 節ではこれらの対照的なアクセント体系のうちどちらが古い体系であるか、どのようなプロセスを経て新しい体系が発生したかを一般言語学の視点から考察する。具体的には、「モーラで数えて音節でアクセントを担う」体系が長崎方言と鹿児島方言の中間に存在し、このハイブリッド（混成）的な体系（hybrid system）を持つ甌島方言（鹿児島県）を詳細に分析することにより、現在の長崎方言に観察される「モーラで数える体系」から 2 段階の変化を経て、鹿児島方言に観察される「音節で数える体系」が成立したという史的解釈を提示する。3.4 節では、モーラから音節へという同じ変化が、現在の鹿児島方言の一部の語彙にリアルタイムで起こっていることを指摘する。続く 3.5 節では、アクセント体系としてはほぼ完全に音節に依存するように見える鹿児島方言が、他の音韻現象では音節とモーラの両方に依存しているということを指摘する。最後の 3.6 節では、モーラから音節へという通時的な変化が持つ意味を、第 2 章で考察したモーラと音節の共時的な関係と対照しながら考察してみたい。

第4章

歌謡と音韻構造

歌謡と言語は、テキストにメロディーやリズムを付与するという共通した特性を持っている。歌謡では歌詞がテキストであり、そこに高低のメロディー（旋律）や3拍子（強弱弱）や4拍子（強弱弱弱）などのリズムが付与される。言語においても、語句や文というテキストに対して、高低の音調や強勢拍リズムなどのリズムが「プロソディー」—旧来の言い方をすると超分節的な特性（suprasegmental feature）—として付与される。この二層性を図示すると次のようになる（H=high tone、高音調）。

(1) 歌謡の二層性

4/4 | ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ | ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ |
 まいごの まいごの こねこちゃん

(2) 言語の二層性

 H H H
 | | |
 まいごの まいごの こねこちゃん

(1) のような歌謡を作る過程では、音楽の楽譜に言葉が割り振られる。楽譜が先にある場合には、音符の連続に歌詞が割り当てられ、歌詞が先に作られた場合には、その歌詞に音符を割り当てる作業が行われる。テキストセッティング（text-setting）もしくはテキストと楽譜の連結（text-to-tune alignment）と呼ばれる作業である。

この章では、この楽譜と歌詞（単語）との対応関係を対照言語学的な視点から分析し、日本語が英語やドイツ語とどのような異同を示すか考察する。特に音符と音韻単位（モーラ、音節、フット）の対応関係に着目し、歌や声

第5章

プロミネンスの衝突

アクセント (accent) は「語」が持っている際立ち (プロミネンス) の特徴である。日本語では「雨」と「飴」のようなペアがしばしばアクセントで区別される。たとえば東京方言では雨が高低 (ア^ーメ)、飴が低高 (ア^メ) と区別され、鹿児島方言では逆のパターン—雨 (ア^メ) と飴 (ア^ーメ)—で区別される。

自然言語のアクセントには主に強さ (intensity) で際立ちを表す強さアクセント (stress accent) と、主に高さ (pitch) を使って際立ちを表す高さアクセント (pitch accent) の2タイプがあるとされる (金田一 1967, Beckman 1986)。前者の代表が英語であり、後者の代表が日本語である。このうち英語のように強さアクセントを持つ言語では、アクセント—強勢 (stress)—が置かれて強く発音される音節 (強勢音節) と、アクセントが置かれず弱く発音される音節 (弱音節) のメリハリが顕著となる。後者では母音の音色があいまいとなり、いわゆる「あいまい母音」(schwa) が生じる。また強さアクセントの言語では、文のレベルで強勢音節がほぼ等間隔に現れることによって拍子がとられることが多い。強勢拍リズム (stress-timed rhythm, stress timing) と呼ばれるリズムである (Abercrombie 1967, Dauer 1983)。

英語のような強さアクセントと日本語のような高さアクセントはあいまい母音の有無など、いくつか顕著な違いを見せる (Fry 1958, 窪田 1998a, 窪田他 2025)。あいまい母音と並んで強さアクセントに特徴的なのがリズム規則 (rhythm rule) と呼ばれる現象で、強勢音節が隣接する環境では衝突する強勢の一方が消える (音声的に弱化する) (Liberman and Prince 1977, Gussenhoven 1991)。たとえば (1a) の例では下線部に生じた強勢の衝突 (stress clash) を解消するために、York の強勢が弱化する (アクセントの記号は、é のような上向き記号が主強勢を、è のような下向き記号が第2強勢を